

歴史研究の宝庫

長崎

みなさんは、「長崎」という言葉を聞いたとき、どの場所をイメージするでしょうか。現在の長崎市を思い起こす人もいれば、長崎県と考える人もいるでしょう。

私は、日本近世期の長崎を題材に歴史研究をしているのですが、貿易中心に運営された都市長崎と、豊かで多様な歴史的個性を備えた現在の長崎県全体という両方の「長崎」を対象にしています。長崎を二つの視点から研究することは、長崎の特質だけではなく、当該期の日本社会のありようを考えることにつながると考えたからです。

複合都市長崎

研究の一つとして取り組んでいるのは、近世都市長崎の仕組みや社会的な成り立ちを明らかにすることです。近世都市長崎は、現在の長崎市よりも小さく、長崎駅周辺から新地中華街あたりまでを指します。

したがって、情報の流れに注目すると、そこから逆に、長崎の都市の特質や、長崎を磁場とする関係が、ヨーロッパ・アジアと、都市長崎、長崎に関係するさまざまな日本の土地へとつながっているのを見いだすことができます。近世都市長崎を出発点に考えることは、日本や世界の歴史のつながりを考える格好のテーマなのです。

集団から成り立つ、複合的な構造の都市でした。江戸幕府の直轄地であることから、支配のため長崎奉行が百人程度の家臣と共に派遣され、その奉行の下で、約二千人の長崎の町人出身の地役人が貿易と行政の実務を担い、時期により変動しますが、おおよそ三〜四万人の町人がいました。それ以外にも、出島のオランダ人や唐人屋敷の唐人といった長期間滞在する異国人や見落とされがちなのですが九州各地の大名が構えた蔵屋敷に送られてきた大名の家臣たちがいました。

これらの諸集団は、それぞれの居住区がだまかに分かれており、身分と居住地とが即応した集団によって構成された都市が長崎であり、そこでオランダ貿易や唐人貿易が行われていました。都市全体が貿易を支える仕組みになっていることから、貿易を行うオランダ東インド会社や唐人たちについて研究すると、おのずとその仕組みを成り立たせていた都市の構造に行きつくのです。

そこで研究では、貿易品や海外情

報、そして西洋の科学技術の中継点となった出島のオランダ商館の史料

と、長崎の都市という空間に関わる日本側の史料の双方を組み合わせて分析することによって、都市長崎の特質を考えています。

例えば、オランダ経由で出島にもたらされた海外情報は、まず長崎の地役人であるオランダ通詞が翻訳します。翻訳された情報は、オランダ風説書などとして幕府の外交政策の検討材料となるべく公式に江戸に送付されますが、当然ながら、長崎奉行所や通詞を経由して長崎の町にも蓄積されます。その蓄積された情報を求め、佐賀藩や鹿児島藩などの九州の諸藩は、自分たちの出先機関である蔵屋敷に出入りする人々（当時「館人」や「屋形人」などと呼ばれていました）を経由して情報を集めます。江戸に送られた情報よりも、詳細かつ本質的な情報を、九州の藩が手にすることもあり得たのです。

兵営国家と島原の乱

次に、もう一つ重要なテーマだと考えているのは、有名な島原の乱について、その歴史的意義を社会の仕組みから明らかにすることです。

よく知られているように南島原市にある原城を舞台に、天草四郎を大将とする四万人弱の一揆軍と、私の推計では十五万人近い幕府軍が、三カ月近く戦闘を繰り返しました。その長期間の戦闘を支えたロジスティックや人の集まり方に注目しています。

近世社会は、兵農分離が行われ、戦闘を専門とする武士たちが持続的に戦い続け、それを農民など他の身分が支える、いわば国家全体が「兵営」として機能する社会システムができた時代とされています。しかし、実際にその社会システ

ムがきちんと機能していたかを検証できる事例は少なく、島原の乱はその極めてまれなケースです。戦争の遂行という点から検討することは、近世社会の本質を考える上で、とても重要なことです。

また、島原の乱を経て、日本国内ではキリスト教禁制が徹底され、やがて宗門改制度へとつながります。さらに江戸幕府は、重要な貿易の担い手であったポルトガル船を一六三九年に追放して、平戸から出島にオランダ商館を移動させます。その後二百年余りの江戸時代を特徴づける宗教制度や外交制度によって、島原の乱は、大きな転換点であったことになりました。

近世の日本社会の特質を考える上で、島原の乱を研究することはとても重要であり、さまざまな論点が生み出されてくるのです。

そして、これらの研究の素材である史料は、長崎だけではなく九州やオランダにまで広く存在しています。長崎を研究することは、長崎という地域の歴史の豊かさを明らかにすることにとどまらず、日本近世社会の特質や、世界の中における日本のありようを考える大きなヒントとなるのです。

長崎を研究すると、世界の中の日本社会のありようが見えてくる

Text by Naoki KIMURA



木村直樹 教授

長崎大学多文化社会学部教授。東京都生まれ。東京大学文学部卒。二〇〇九年博士（文学）。東京大学史料編纂所助教を経て二〇一三年より長崎大学に兼任。専門は日本近世史。長崎から江戸幕府の外交・政治史を研究。

近世都市長崎の概念図



多文化社会学部の新入生合宿での原城フィールドワークの様子。